

横鳥村山部と、明治5年、比田井天来が誕生した北佐久郡協和村は、直線にすると、1里半(約6km)ほどの距離だが、これまで4歳違いの二人は一度も出会ったことがなかった。

だが、五無齋は、2年後、明治42年に開校する運びの横鳥尋常小学校に掲げる扁額の揮毫を、一面識もない天来に依頼した。五無齋の眼力が、新進気鋭の書家、比田井天来を、日本の近代化を国家の中枢で推進した明治の重鎮、渡辺国武元大蔵・通信大臣に比肩する人物と見抜いていたからにはかならない。

直接会ったことはないが、同じ北佐久郡川西出身の若き能書家の評判は、五無齋の耳にも自然に入り、五無齋はいつしか、天来に羨望や競争心、尊敬、畏怖の入り混じった関心を抱いていた。五無齋が、天来の噂を初めて耳にしたのは、明治24年のことである。

この春、長野県師範学校を卒業し、下水内郡飯山小学校に赴任した五無齋は、協和村の常太郎(天来の幼名)という青年が全臨した、書聖、王羲之の「蘭亭序」の見事さを耳にした。前山村にある貞祥寺の扁額「知足軒」の評判も聞いた。子どものころから、篆書、隸書、楷書、行書、草書のすべての書体に通じ、書の勉強のために長時間、一心不乱に書き続け、座っていた畳が腐ったという風聞に

は、豪胆にして動ずることの稀な五無齋もさすがに度肝を抜かれた。

明治30年、30歳にして小県郡の武石小学校長職2年目を迎えた五無齋は、天来が上京して小石川哲学館に入り、書画、当時、書道における維新の代表的な書家、日下部鳴鶴に学んでいることを新聞の芸欄で知った。

その後、天来は、二松学舎に転学して書の道に進んだ。そして、三省堂「日本百科大辞典」の書道項目を執筆し、書道界にその名が知られるようになった。五無齋は、この百科大辞典を知人から借り受け、まさに熟読玩味し、天来の見識と書に寄せる情熱に舌を巻いた。

ちょうどその頃、時を同じくして五無齋の活動も多岐にわたり、充実を極めていた。教育者としても、鉱石採集者としても、長野県下各地で後世に残る実践を重ねていた。小・中学生の同和教育資料「あけぼの」に取り上げられている、人権文化の創始者と評される長野市における実践も、パリの万国博覧会に13種の鉱物を出品したのもこの頃である。

明治34年、五無齋は、天来が難関の「文検」(旧制中学校習字教師資格試験)に合格し、東京陸軍幼年学校の教授嘱託になったことを知った。奇しくもこの明治34年は、五無齋が、「人の子を賊いたる事少なからず甚だ恐縮の至りにつ

き」という辞表を提出して教職を辞した年であり、五無齋は、人智を超えた何かと交錯し、天来が教職に就き、片や自身自身が学校教育の場を去ることに不思議な縁を覚えた。

10年間の教師生活に終止符を打ったが、五無齋の活動の軸足は、常に教育の領域に置かれていた。

講演。鉱物採集と標本の整理。新聞の連載。保科塾の開塾。県下各校へ岩石標本寄贈。信濃教育会付属図書館(現県立長野図書館)の設置。狂歌集の刊行。衆議院議員補欠選挙に立候補。筆墨行商。週刊紙「信濃公論」の発行。……。

五無齋自ら、「故郷に難しの原理により何時も教育に関係ある事業のみ。」と述べたように、五無齋の活動はすべて教育の範囲を超えず、神聖と信じた教育に生涯を捧げたのである。

その五無齋が、渡辺国武子爵邸を訪れる1ヶ月前の明治40年1月上旬、天来に一通の書状を送った。

「拝啓、寒気凛烈のみぎり、益々御健勝にて御活躍のことと拝察申し上げます。小生、筆墨行商を生業とする輩ですが、母校北佐久郡横鳥尋常小学校に掲げる扁額を是非とも貴殿に揮毫していただきたく、突然、まことに不躰なお手紙を差し上げる次第です。揮毫の文言は貴殿に御

一任致します。多事多端の折柄、失礼の段重々承知の上での御依頼でございます。若し御差し支えございませぬようでしたら、御一報いただきませぬれば、幸甚の至りに存じます。取り急ぎ、御依頼まで。敬具。」

数日後、この書状を手にし、差出人を確認した天来は、五無齋・保科百助の名に驚いた。

「あの御仁……!」
天来の記憶の裏から、折々耳にした五無齋にまつわる風評や感慨が一気に迸り出た。

保科百助という名を初めて聞いたのは、野沢町の有隣義塾に入る直前であったので、15歳のときであったか。製紙工場を営む父親から、上田の恒川塾で学ぶ横鳥村の保科百助という青年が、長野師範学校へ入学するという話を聞いたのである。

書状を手にした天来は、20年以上も前、父親から「横鳥村の保科百助」と聞いた瞬間、睨んで浅間山、黒斑山、高峰高原、湯ノ丸山と続く山並みの麓から山の端まで一望する雄大な景色が広がったことを、懐かしく思い浮かべた。

その数ヶ月前、親には言わず、近所の子を引き連れ、中山道を望月宿から笠取峠まで遠出したときの、横鳥村から眺めた景観が鮮やかに甦ったのである。